

## 湾奥

陸をなめる冷たい波  
ねっとりとした薄い皮  
口を嚙む泡  
奥行を有する空気は何ものをも包まない

ここへ君を呼び寄せたのは  
この僕か、それとも  
封筒の中へ忍び込んだ  
比重の高いこの空気が

失われたことを知らせる者は  
既に死に絶えてしまった  
生まれることなく  
造り出されるだけの世界があると、君はいう

削り取られ  
研磨されることを悦ぶ君は  
薄い波の中に足を踏み入れる  
音もなく消える泡の中へ

天井のない洞窟のようなこの湾の最奥で  
僕は初めて君の姿を俯瞰する  
波にまといわれつかれる足の指から  
白い服に包まれた肢体

<sup>いん</sup>印を結ぶような仕草の手

そして黒い髪  
ふっくらとした頬  
遠い眼差し  
その彼方に続く深緑色の水面  
それをはさみ込む断崖と緑の丘  
それらを吸い込むねずみ色の空

いち日毎に途切れてしまうことに  
怖れおののく僕は  
今や還ることなど思いはしない  
連続とは異なる連綿とした時間

そのことを君も気付くだろうか

波に包まれるなど思いもよらぬ、ここでは  
削り取られ、研磨されることを希う  
君は還ると言い出せるだろうか

(2003.10.2)